

「鳩の翼」における Innocence¹⁾

玉崎紀子

I

Henry James はヨーロッパにおける無垢なアメリカ人の経験を、繰り返し書き続けたが、そのアメリカ人の innocence は恐らく James 自身の評価の変化のために後期になると変化してきている。すなわちここにとりあげる後期作品 *The Wings of the Dove* 「鳩の翼」のヒロイン Milly Theale の innocence は、初期作品の主人公達の全くの無邪気さのためヨーロッパに熱中しすぎて、身を滅ぼすといった子供っぽい innocence²⁾ とは異っている。なぜなら不治の病のために苦しみを負いながらなお勇敢に生きようと努力する点で Milly はキリストに似ており、ヨーロッパ人に裏切られながらも彼らを許し、愛し続けて死ぬ点まさにキリストを象徴する innocence を持つからである。そして Milly の生涯がキリストのそれに似ている他に、さまざまな象徴的な Milly の描写が Christ image を作りあげている。若く無垢なアメリカ娘で、両親の死による莫大な遺産を持ってヨーロッパに憧れてやってきた Milly が、神によってこの世に遣わされたキリストの如く、あまりに無垢なために、彼女の巨富をねらうヨーロッパ社交界の人々に翻弄される。Milly は彼女自身親しくしている Kate の婚約者である Densher をそれと知らずして愛するようにとしむけられる。しかし Milly との最後の会見を思い出して、彼女を欺いた Densher は次のように感じる。

The essence was that something has happened to him too beautiful and too sacred to describe. He had been, to his recovered sense,

forgiven, dedicated, blessed; but this he couldn't coherently express.
(II, 343)³⁾

Milly は裏切られた苦しみの後に何か人間的なこの世的な愛を超えたものに達し、Densher を許したのだ。人間性を超越しているゆえ、彼はそれを筋道立てて言い表わし得ないのである。今まで人間的な愛で Densher を愛していて、彼と結婚したいというこの世的な気持を持っていたのだが、そういう愛をこえた「神の愛」‘divine love’⁴⁾のようなもっと広い愛を持って Densher が Kate の婚約者とわかった今となっても、初めの志どおり、Milly は彼に遺産を残す。それが Kate と Densher のものになると知っていながら、いやむしろ二人のためになると知っているからこそ、残すのである。この裏切りに対する Milly の行為は、ユダに対するキリストのその如く、愛に満ちている。

Densher が Kate のたくらみに従って Milly に親切をしていて、Milly に偽りの結婚を考えさせようとしている過程においても Densher は Milly の前では偽りが偽りではなく感じ、それは Milly が全てを彼女の innocence で浄めたからだ (II, 239) と考える。Milly の死後になって始めて、人々は Milly が全てを、Kate のたくらみを始め、他の全ての悪を浄めたのだ、いわばキリストの如く、人々の罪をあがなって自ら犠牲になったのだと覚る。だから計画どおり、Milly の死によって遺産を手に入れたものの、Densher と Kate には思いがけない変化、結末が訪れる。Milly との交際により、Milly を愛するふりをしているにすぎないと思っていた Densher は彼女の死後になって無垢な Milly を愛し、Kate を恐い女と感じている事に気づく。そして思いもよらない二者択一——Milly の財産なしの Densher との結婚か、あるいは Milly の財産をとるかを決めよとせまる彼に Kate は真実を覚り、“We shall never be again as we were!” (II, 405) と言って別れる。Milly のために二人の愛はもとどおりではなくなってしまうのである。彼らばかりではなく Milly の接したイギリス社交界の人々も彼女の影響をうけている。Milly の死に際して彼らの悪と Milly の innocence の勝利を認めざるを得なかったのであるから。‘After that

(=Milly's death), it seems, Lancaster Gate is no long the same⁶⁵) と Dorothea Krook のいうとおりである。この全てに影響を与えた Milly の死は、無垢な故に、その死により全人類の罪をあがなうことのできたキリストの死を象徴する決定的なものである。さらに死後 Milly は Densher の心に生き続けることにより、Milly はいわば再生したのであるから、この作品は 'the death and rebirth of a god'⁶⁶ という myth の原型 (archetypal pattern) を持っていることになり、とりわけその神の如く無垢な人がアメリカ人で、ヨーロッパという世界に入ってその犠牲になるという American myth の一つであるといえる。Richard Chase もいう如く myth だからといって即 romance ではない⁶⁷が、この作品は次に述べるように romance の系譜をひいていることは否定できない事実である。Pastoral romance の源泉である *Daphnis and Cloe* やその系譜にある Shakespeare の *The Tempest* と同じく、innocent な美少女が世俗をはなれていて、彼女とはちがう世界から来た若者を恋する、つまり他の世界との接触により人生に目覚めるという pastoral romance の本質的な必要条件⁶⁸を満たしている。又Milly が 'dove' とか 'angel' と考えられたり、中世風のヴェニス の城に住んで 'princess' と呼ばれる時、Gothic romance の雰囲気を持っている。さらに Kate と Densher の婚約、Milly の病気などは mystery であり、いわゆる melodrama と批判されるが、むしろ romance と評価してもよい要素である。さらに又、James は小説家として realistic な視点を持ってはいるが、彼のヒロインは romancer の如く世界を眺める⁶⁹、idealistic に世界を見ようとする romantic な人物である。それ故、Milly を必ずしも allegorical にキリストとみなさずとも、この作品はやはり romance になるということになる。Milly のすべてはキリストを思わせるものではあるがそれはあくまでも James が Minny Temple という理想の女性のイメージによって Minny を描いたために究極として宗教性を持つ程に高められたからであり、Milly の innocence 自体は Patient Griselda に始まる romance の典型的ヒロインの重要な特質、constancy と密接な関係を持っているものとみなすこと

ができる。Milly は Victoria 朝のヒロインによくあるように自分の Densher に対する感情を innocence のあまり愛と気づかぬまま長い間黙って彼を愛し続け、そして patient martyr となって死ぬ。Densher の裏切りを知ってなお Densher を許し、彼に遺産を残すという 'divine love' の最も重要な要素でさえ、Densher が Kate の婚約者と知っても愛し続けた constancy を示しているのだし、遺産はいわば Milly の永遠の愛の証しなのである。故にキリストという connotation を除いても Milly は十分に romance のヒロインとなることは明らかである。又、「死における愛の完成」という *Tristan und Isolde*¹⁰ 伝説以来の romance のテーマで 'death and rebirth of a God' の myth は考えなおされることができる。さらに又若い娘の悲劇的な死はアメリカ小説にありふれたものである¹¹ から、この作品は Richard Chase のいう American romance の伝統にあることが明らかである。

しかし、James 自身 American romance にあき足りず、Hawthorne や Melville の作品にはイギリス小説にある大切な社会的要素が欠けていると批判し、さらにそのイギリス小説の重要な要素、manners (風俗)¹² を求めて、ヨーロッパに行き、そこで暮らすことによって彼の作品を真の novel にしようと努力しただけに、James の作品はそれまでの American romance と同一とは言いつれず、むしろ manners を描くことにより、アメリカ最初の novelist¹³ になったと言える。そして *The Wings of the Dove* における、身分階級と同時に金力を重視する snobbery に満ちたイギリス社交界の風俗の realistic な描写はこの作品が完成した novel であることをうなづかせるものである。この点無垢な人物と悪との関係を描いているため *The Wings of the Dove* との類似点¹⁴ をしばしば云々され、その source とまで言われる Hawthorne の *The Marble Faun* が絵のような背景として、ヨーロッパを舞台に用いているだけで、James の如く what the world is like を示すためのヨーロッパ描写ではなく、manners には重きをおいていず、完全な romance であることに注目すべきであろう。二つの作品は無垢なアメリカ娘と悪の秘密を持つ美貌のヨーロ

ッパ娘、そしてその恋人という人間関係を持ち、ヨーロッパ娘の悪事により物語が進展するため似ているのだが、*The Marble Faun* が副筋として美術を学ぶアメリカ少女と青年のヨーロッパ美術を通しての人間の成長を描いているものの、主題は社会的背景と全く無関係なアダムスの原罪と結びつく romance であるのにひきかえ、James の人物はヨーロッパという社会と密接に関わりあって truth に目覚め、成長し、発展していくという realistic novel の主題の上で描かれている。ことばを変えていえば¹⁹⁾、その reality を emotional pressure に負っている romance を Hawthorne は書き、同じく人物の内面を描くにしても、外的な awareness of the world を持つために、描く人物をとりまく social pressure の影響を重視する realism に依って James は小説を書いているのである。

II

Realistic novel の要素は、この作品のいわばもう一人のヒロインとでもいうべき Kate Croy の物語を検討した時に明らかになる。普通 Kate は悪女とされるが、彼女は悪女とはいききれない¹⁰⁾ 資質を持つ。Milly と Kate が対照的であるとは言っても melodrama 的にヒロインと悪女ではない点、二人が同じような資質を持つのは、realistic novel だから可能にされたと言えよう。

Kate はイギリス社交界の中心人物なのだが、始め Milly と同じように世間と隔絶された孤独の中にあり、innocent な少女であったのに金力を重視するイギリス社交界を「経験」することにより、社交界の悪に染ってゆく。始めは窓から見る伯母 Mrs. Lowder の邸の外のありさまにさえ胸をときめかし、初恋の相手 Densher に笑われる程、無垢であったのに、そして貧しい Densher との恋を、財産と身分を重視する金持の伯母との関係を断ち切っても貫ぬこうとしていたのに、イギリス社交界で生きぬいていくうちに、だんだんと社交界の worldliness を身につけ、結局伯母と同じく、quantity を重視するようになり、Densher との結婚の幸福に必要な財産を手に入れるためなのだと言いつ

しながら、彼女の大切な愛を人々に隠し、Densher を Milly に言い寄せ結婚させようとする。この過程において Kate は彼女の無垢も初恋も失ってしまう。少女時代の innocent な Kate の伯母の邸での生活は、*Mansfield Park* の Fanny Price や、*Jane Eyre* を思わせる Victoria 朝のヒロインのものである。しかし社交界に生きる Kate は、それとは全く対照的な *Vanity Fair* の Becky Sharp の如き Victoria 朝 snobbery に支配される人物であり、批評家により James は ‘comedy of manners’ を描くと解されるのももっともなほど、恋も金も結局得られない皮肉な運命にある点で、ある意味で、Becky 的な側面があると言える。しかし、*Vanity Fair* の如く panorama 的に社会を眺め、Becky も単にその一員として描かれているのとはちがって、社会そのものより Kate という個人の Victoria 朝社会での運命に重点をおいて描かれている。ともかく、このように社会に反応する ‘social creature’¹⁷⁾ として Kate の性格の発展が描かれているので、Milly を中心とする物語がキリストを象徴する romance であっても、Kate の物語の現実的社会的要素が、この作品に reality を添え、真の novel を作りあげている。すると Kate を中心とする部分が realistic novel で、Milly の方は romance にすぎないのかと誤解を生むであろうが、Milly の部分にも自己に目覚め、成長する realistic novel の要素がもちろんあるのである。さらに Kate の性格の発展は小説的興味を喚び起すものではあるが、最も重要な Kate の内面的葛藤を描かず、Kate が ‘evil plot’ を実行していく過程を Densher の視点によって外面からのみ語るという James の視点 ‘point of view’ の技法により、読者は彼女に対して少しも sympathy を持つことができないで、Kate に秘密を半分隠されている Densher と同じく、彼女を薄気味悪く感じるようにさえなる。

恋人への愛を人々に隠し、たとえ遺産という大きな償いがあるにせよ、恋人を他の女性に接近させ、恋人がその女性に「親切」にするのを見ているのが、恋人と会う唯一の機会だという状況におかれた Kate の苦しみが始ったとたん、James は彼女を ‘center of consciousness’ の役割からはずしてしまう。つまり

その重要な時、よりによって Kate の心中は読者に少しも語られないのである。これは読者に Kate に対して sympathy を持たせないための技法であるが、外からのみ見られる Kate の性格をその非人間的な artful plot が表わすことになり、その plot の犠牲となる悲劇の故に Milly の鳩のような無垢を一層きわだたせることになる。すなわち Kate の物語がいかに現実感に満ち、novel としての reality を持っているとしても、あくまで中心は Milly であって Kate はその背景を作る人物にすぎないことが明らかになる。たしかに Milly は novel のヒロインとしてはあまりに ethereal であり、神の愛を象徴する程の innocence は現実感がなく、彼女のまわりをとりまく雰囲気は fairy tale 的である。しかし James の技法、Milly を romance の princess の如く、直接人の目にさらさず遠くから眺めるという 'indirect presentation'¹⁸⁾ が逆に realistic な効果をあげている。すなわち、romance の princess に見せるために、Milly は作者の口から直接に語られるのではなく、彼女のまわりの人々によって語られ、読者は多くの人々の印象を聞くことになる。Milly の普通ではない美質、神の如き innocence はそれが間接的に語られるが故に読者を納得させる。この視点が多くの印象の合計なので、読者は客観的だと思い、信じるという realism の効果を生み出している。作者を完全に読者の前から消してしまうこの20世紀小説の重要な技法の開発者である James の 'point of view' が novel というより romance の雰囲気を強めるために使われ、しかも novel に必要な realism を生み出していることからわかるように、*The Wings of the Dove* においては romance と novel の要素の融合がなしとげられている。

この romance と novel の融合は、この作品の中心、'the whole actual center'¹⁹⁾ と James に呼ばれる Book Fifth に極めて顕著に現われている。そこでその検討により、この作品における Innocence の特質を探っていきたい。

III

James の作品においていつもそうであるように、この *The Wings of the*

Dove においても、ヨーロッパは paradoxical な二重の意味を持つ。なぜなら、Milly はヨーロッパ社交界に登場するや、人々に ‘success’ とか ‘prize’ とか言われてもてはやされ、Milly 自身その ‘brilliant life’ (I, 209) に陶醉し、爛熟したヨーロッパ文明の美に接して初めて life を知ったと思う。だが未だに文化果つる所である19世紀初めのアメリカに育った無垢な Milly にはそのヨーロッパ社交界の雰囲気は相容れないものであり、Milly はそれを ‘elegant’ だが ‘empty’ (I, 218) だと批判し、ヨーロッパ文明が爛熟の頂点に達し、全ての人々に抵抗しがたい魅力を持ってはいるものの、腐敗しており、無垢な Milly をおびやかす程、mysterious と感じる。このようにヨーロッパ社交界の風俗 manners を通して、Milly は彼女の無垢とは全く反対ないわば realistic life に目覚め、‘European sophistication’²⁰⁾を知る。この点では Kate が社交界の「経験」により innocence から目覚めるのと同じである。しかしその後 Kate は自らを悪の道に踏み入れてしまい、Milly の死後初めて自らの非に気づくのに対して、Milly は社交界の「経験」により成長はするものの、悪に染まることはない。このように美しく魅力的だが、悪の意味を持つ life に象徴されるのが、ヨーロッパの一つの意味である。一方では、良い意味でのヨーロッパは、ヨーロッパの伝統と歴史を持つ美術品に表わされ、Milly はこのヨーロッパによって、彼女の無垢からそれに反応して、spiritual life に開眼する。生き生きとした魅力を持つが、陰謀に満ち、感覚的美しさを持つヨーロッパ社交界の雰囲気は Milly のものではなく、それはむしろ Kate がその中でびったり調和していると Milly が考えるのでわかるように Kate のものである。しかし、Milly の無垢から生ずるこの世のものとは思われない不思議な魅力のために、そして彼女の持つ莫大な富のために彼女は ‘princess’ と称され、ヨーロッパ中世の皇女である Bronzino Portrait と似ていると言われる。この肖像画を見て Milly は、美術品である肖像は ideal life を持っていると感じ、自らもその ideal life を求め始める。すなわち Milly はヨーロッパの経験によって二重の意味で人生に開眼するのである。まず社交界を通して realistic life に、次に美術品を

通して *spiritual life* に開眼する。そしてどちらの *life* に開眼する時も、彼女の無垢が重要な原動力である。さらに *society* も *arts* も各々 James のあげている *manners* の項目であることから、この点でも *romance* と *novel* の要素がからみあっていることが明らかである。これらの二つの目覚めはほぼ同じことばで対立されて語られていて大変興味深い。すなわち *Bronzino Portrait* を見た時の Milly の感動は、

Once more things melted together... the heavenly and the history and the facility and the splendid midsummer glow; it was a sort of magnificent maximum, the pink dawn of apotheosis coming so curiously soon. (I, 220)

というしばしば引用される *paragraph* だが、この始めの句は実は、ヨーロッパ社交界の雰囲気后感嘆した Milly のことばとして

The elements melted together and seasoned the draught.... (II, 209)

とすでに語られたものに対応しているのである。

さて、Milly と瓜二つと社交界の人々が言う中世の皇女の肖像画 *Bronzino Portrait* を見、Milly は「肖像の皇女は死んでしまっているのだが、芸術によって変えられて、生き続けており、生きているものに語りかけている²¹⁾」ことを覚る。Milly は肖像の皇女が生きていることに、芸術の不滅に感動して、至高の喜びを感じ、目には涙があふれる。なぜならこれより先の

“I shall die as if I were alive!” (I, 119)

という彼女の事ばから明らかなように、彼女は自らの早死に気づいているがゆえに、芸術の持つ不滅、永遠に憧れ、彼女自身それに近づきたいと願っている。そこでその肖像に似ていると言われて、

“I shall never be better than this.” (I, 221)

という Milly はこのヨーロッパの美である *Bronzino Portrait* に接して、その

不滅を知り、この芸術の不滅に自らが達することができないと言っているのである。さらにその不滅に対して人間の命がいかに果かないか、とりわけ早死の決まっている自分の果かない命を考えていることを伝えている。ヨーロッパの美術品はいわば ‘Ars longa vita brevis’ を Milly に明らかにする手段であった。このように James の人物はヨーロッパに来て人生に開眼するのだが、とりわけヨーロッパの芸術それも古い歴史を持つ美術品によって spiritual life に目覚めることは、ヨーロッパにこそ life がある、しかも美術品こそがヨーロッパの essence だという鑑識家 James の思想を端的に語るものである。

しかしこの Bronzino Portrait scene は彼女が完全に人生開眼するための準備段階にすぎず、ここでは Milly は人生の本当の意味を覚っていない。彼女の早死と芸術の不滅という相反するものを結びつける方法を知らない。彼女をさらに完全な開眼へと導くのは、Milly が自分の病について明確に知りたいと思って訪ねる、ロンドンの名医、Sir Luke である。Milly は彼にいろいろと語りはしないのだが、Sir Luke は不思議と彼女と一致した洞察力を持っていて彼女を理解してくれる。彼は Milly を Christ とみなす程に彼女を高く評価し、彼女が moral life を送るのに秀れた可能性を持つことを見抜いて

“Be active, without folly, ... for you're not foolish: be as active as you can and as you like.” (I, 248)

と彼女を励ます。Milly は彼女の無垢の故に彼のことばに直ちに反応する。彼女の病の本当の状態はどうか Sir Luke は教えてくれなかったが、それだけに病が重いことを覚って真剣に考え始める。この Regent Park での Milly の意識の内面の描写は、*The Portrait of a Lady* の Isabel Archer が夫 Osmond と Madame Merle の裏切りに気づき、そして彼女自身の全過去をふりかえる第42章と同じく重要な意味を持っている。その結果、Milly は死、しかも早死をはっきりと知り、彼女の人生は完全に変化するのである。だからこの熟考の後、life は Isabel にとってと同じように Milly にとってもこれまでと

は異った深い意味を持つようになる。Milly は死が明確になったが故にそれだけ真剣に life を追求し始める。彼女にはヨーロッパ社交界が持つ vital life, sensual beauty を手にいれることは不可能である。しかしもう一つのヨーロッパの life, ヨーロッパの美術品の持つものを求めることはできるはずだ。残る短い life において精神的に秀れた美しさを自分のものにすることが、美術品の持つような永遠に近づく道だと Sir Luke のことばから判断する。それは 'beauty of the bloom' (vital なそして physical な美を表わす) は失われたが 'beauty of the idea' (I, 248) すなわち spiritual beauty が自分に差し込まれていると Milly が語る時明らかである。ここで倫理的意味での人生に開眼した Milly は、早死を悲しんでいないで、充実した生を送ろうと新たに決意する。その決意のもとに、世界に新たな思いで目を見はることになる。Milly は一人で街を歩く自由を得たことを、いつも companion と共にいなければならぬ王女の如く、無邪気にも喜ぶ。この自由こそ life だと思い、これまで life を味っていなかったと感じる。この自由を味わうことから life に目覚めるのはヨーロッパにきたアメリカ人が共通に味わうものだが、同時に無垢で romantic な Milly の性格の表われである。さらにこの romantic な life だけでなく、市井の人々、そして特に下層階級の人々の life をかいま見る。そこで Regent Park において、多くの労働者たちを見、彼らも又彼女と同じように生きたいと願えば生きることができると思い、そういう彼らと life を分かち合っていると Milly は感じる。彼らと自己同一化したいと願う。この部分は、social, realistic novel となる要素であり、romance のヒロインで princess にすぎなかった Milly の社会的目覚めを描いて、この作品を真の novel にする。このような生と死の問題に直面していて、Milly は不思議に innocent であり、そのため彼女はしかつめらしいヒロインとなるのを免れて、魅力ある愛らしいヒロインになる。princess の如く一人を喜び、気まぐれを愛し、自由を heavenly と言い、世界を美しいと感嘆する Milly の innocence と彼女の life の問題が共存していることが Book Fifth の大きな特徴である。

Milly にとって life の問題が解決される Kate との scene においても同様に豊かな romance がある。そしてここで「鳩」というイメージが決定的になる。Milly は Kate に鳩と呼ばれて、鳩のように生きることが彼女にとっての真の life だと覚る。彼女の求めていた spiritual beauty の完成は鳩のように生きることであると覚る。このように抽象的に倫理的道を求めている時も Kate に無邪気な言葉で接し、Kate は彼女を無垢な小さな子として扱う。Milly の言葉は子供らしい無邪気なもので、それゆえ、誰の心にも感動を与えるものとなる。イギリス社交界の悪について語る Kate の言葉を聞いても Milly は無邪気にも 'absurd' (I, 282) という程で、Kate の警告を信じるどころか、悪を語る Kate を、子供っぽくも恐がったりする。彼女は無垢で自分の莫大な富をほとんど重視してないので、イギリス社交界の人々が、それを利用しようと企んでいるなどとは夢にも思わない。彼女の無垢は Kate の警告を彼女に理解させない。だが危険を警告され、遂には社交界の悪に気づくことになるが、その後も Milly は世間をもっと知り 'personal' なものをもっと欲しいと願って、つまりヨーロッパにおける realistic life を求めて、イギリス社交界に留まることにする。そこで Kate は Milly に "you're a dove" (I, 283) という意味深いことばを言うのである。その dove ということばを Milly は靈感の如くうけとる。Kate が dove と言った第一の意味は、Milly の富である。富の故に強くはばたき、まわりの人々をおおい、人々に強い影響を与える鳩の翼を Kate は思い浮べている。しかし Milly はそれを全く精神的にのみ解釈する。

'Because you're a dove'. With which she felt herself ever so delicately, so considerately, embraced; not with a familiarity or as a liberty taken, but almost ceremonically and in the manner of an *accolade*; partly as if, though a dove who could perch on a finger, one were also a princess with whom forms were to be observed. It even came to her, though the touch of her companion's lips, that this form, this cool pressure, fairly sealed the sense of what Kate had just said. It was moreover, for the girl, like an inspiration: she found herself accepting as the right one, which she caught her breath with relief; the name

given her. She met it on the instant as she would have met the revealed truth; it lighted up the strange dusk in which she lately had walked. *That* was what the matter with her. She was a dove. (I. 283)

ここで読者は Milly の鳩の如き精神的美しさを改めて意識する。dove image は、Milly の全く詩的な感想と相まって romance の雰囲気が高めることになる。しかしこの最も romantic な scene で Milly はこころばらく、Bronzino の肖像画を見て以来、求め続けていた truth を見出す。彼女の人生が短いと知っているため、Milly は彼女にとっての充実した生、つまり彼女にとって人生における最高の真実は何かと探し求めてきた。彼女は爛熟した文明にあるヨーロッパの生き生きした感覚的美に感嘆し、さらにヨーロッパの美術品にもっと高度な充実した生、つまり不滅、永遠を認める。そして人間個々の人生も又そのような永続的な美を持たなければならないと感じる。しかし彼女は自分自身は生き生きした永続的なものに到達するためにはあまりに重病であることを知り苦しむ。その悩みのうちに Sir Luke によって、若くして死ぬとしても倫理的な生を追求することによって、人生の最高の真実に到達できると教えられ、倫理的な精神的美は、芸術の永遠の美に相当すると覚る。抽象的な Sir Luke の言葉は、Kate の「あなたは鳩」という言葉で具体的にされ、それは Milly にとって啓示となる。たとえそのために苦しまねばならないとしても鳩のように行動し、鳩のように生きることが、精神的に秀れた生を生きることになると覚る。このように Book Fifth における各エピソードにおいて段階的に、Milly の発展が描かれ、Milly がちょうど Jane Austen のヒロインのように 'developing through experience toward a realistic knowledge of herself and her world'²²² と定義づけられる通りに realistic novel のヒロインの役割を果たしていることは明らかとなる。しかし一方、dove scene において、Kate のことばに Milly が直ちに反応し、鳩のように生きよう、最終的に死という形になるうとも、そこに真実を求めようという、life in death の認識を持つということは、Milly の途方もない innocence と同じく、寓話的である。だが James は寓話的手法に

より人生を語ろうとする作家といえるのではなからうか。つまり彼の主人公は必ず富を持ち、いかに生くべきかの問題といっても、決して世俗的経済的生き方には悩むことはなく、ただ倫理的精神的生き方だけを追求することになる。すなわち富や innocence は、一面非常な romance であるが、そこに James の特質がある。彼はまじりけなしに精神的精髓だけで人生をとらえようとしているのである。その最も完璧なのが、この作品 *The Wings of the Dove* である²³⁾。

このように Milly の持つ innocence といういわば最もアメリカ的な moral が、ヨーロッパに接し、反応することにより、人生の真実を知ることができたということは、realistic novel における主人公の目覚め、成長を扱っていることになるが、一方では明らかに American myth である。歴史あるヨーロッパは、歴史のないアメリカ人にとって憧れであり、歴史の代りに持つ無垢というアメリカの殻から解き放してくれるものである。そこでアメリカ人はヨーロッパで初めて life に目覚め、真の life を味わったと感じる。しかしそれだけではなく、無垢なアメリカ人は、無垢であるがゆえに、歴史あるヨーロッパの汚れに気づき、再び新たに目覚めることになる。Milly は歴史ある豊かなだが汚れをも持つヨーロッパにより、realistic life に目覚め、その汚れに気づいたが故に、自らの持つ innocence によって反応しつつ、精神的に高められた、だが内省的な life を求めるのである。James は Milly が spiritual life に目覚める過程を、美術品によって自己認識を始め、ヨーロッパ人の高い精神 Sir Luke に導かれ、さらに Milly の無垢によって一瞬浄められたかのような Kate によって、悪の秘密を持ちながら、やさしく 'you're a dove' という彼女の言葉によって、自己認識を完成するといった、巧みな手段、そして意味深い道筋で表わしている。歴史を持たない Milly の無垢が歴史に反応²⁴⁾して life を見出したということは意味深い。

結局、realistic novel としてイギリス社交界が描かれ、その社交界において、romance のヒロインたる Milly が人生に開眼することが描かれる *The Wings of the Dove* には romance と novel の要素がこのようにさまざまな見地から

融合されていると立証されるのである。

IV

The Wings of the Dove のヒロイン Milly は超世俗的で real でないとその性格描写を批判されるが、その全く世俗を超えたところに彼女の不思議な魅力がある。彼女の神の如き無垢が *indirect presentation* で描かれて、Milly をさらに愛らしいヒロインにしており、James の精妙な、だが解りにくい文体で語られているこの作品を魅力あるものになっている。しかも数ある James のヒロインのうちでも Milly 程徹底的に innocent なヒロインは他にない。なぜなら彼女の無垢は神の愛と言われるほどに完全な美德であり、それは困難であっても最後まで貫き通され、その plot と完全に調和しているからである。故に *The Wings of the Dove* における Innocence はこの小説の最も重要な要素となっているのである。この重要な特質 innocence は ‘international situation’ を扱う小説は言うまでもなく、James のほとんど全ての作品に現われる。ヨーロッパにおけるアメリカ人という国際状況を扱わない時でも、世俗的世間での芸術家、大人の世界における子供というように innocent な人物と、彼の経験²⁵⁾を必ず扱っている。従って「無垢から経験へ」というテーマは James には典型的なものであると言える。このテーマは教養小説 ‘Bildungsroman’ の伝統にもあるものなのだが、‘Bildungsroman’ のテーマと James のテーマとはいくらか相異している。つまり、普通の Bildungsroman のイギリス小説において主人公は「経験」によって自己の誤ちを覚り、それから内的葛藤を経て成長する²⁶⁾が、James の主人公はあまりに無垢で誤ちを犯すことはできず、ただヨーロッパ人の視点から見た時、まちがっていると見えるにすぎない。James の「無垢」な人物も又、「経験」によって、ヨーロッパの生活の経験によって、人生に目覚め成長するのだが、その「経験」は外的なものに留まり、イギリス小説の「経験」に比べると否定的な経験である。否定的といえなくとも、Milly のヨーロッパ社交界の経験の如く、彼女の無垢と密接に結びついた倫理的精神的目覚め

のテーマより、低く評価されている。そして James の人物は経験によって成長すると言っても innocence を失わないことが特徴で、神話的な人物である。無垢な人を意識的に世俗の世界におき、そこでの無垢な人の苦しみを描くために、世俗的なみにくい世界に対して無垢という精神的美しさが、James の小説では極めて効果的である。さらに James が扱うのは単なる innocence ではなく American innocence である事は、American myth が James の小説の中核となる事を示し、結局 American myth が *The Wings of the Dove* の本質的魅力を作っているということになる。

要するに James の人物がヨーロッパを通して、life に目覚め、成長するというのは小説の要素なのだが、ヒロインがあくまで innocence を貫ぬき通すということは romance の特質であり、innocence は変らないで、しかも性格発展があるところに、romance 的要素を高い次元で提示している James 文学の特質があると言える。

註

- 1) 本稿は、1970年1月に提出した修士論文にもとづき、4月の名古屋大学英文学会総会において口頭で発表したものに補筆したものである。
- 2) 一般に初期作品については等しく言えることではあるが、特に *Daisy Miller* は有名であるからそのヒロインを思い起して頂けばよいと思う。
- 3) 引用は全て、*The Wings of the Dove* (1902) I, II. (ニューヨーク版)による。
- 4) Quentin Anderson はその著書 *The American Henry James* (New York, 1957) において Henry James は父の Swedenborg 神学思想に影響されて小説を書いたとし、彼の小説をその思想にもとづき、allegorical に解釈しているが、あまりに一方的で十分に納得させるものではない。しかし Milly を 'divine love' と解する (Ibid., p. 235) のは全く適切であると思う。
- 5) Dorothea Krook, *The Ordeal of Consciousness in Henry James* (Cambridge, 1962), p. 219.
- 6) Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (New York, 1957), p. 244.
- 7) *Ibid.*
- 8) Carol Gesner, "The *Tempest* as Pastoral Romance", *Shakespeare Quarterly*,

- X (1959), p. 531-539. James のヒロインが *The Tempest* の Miranda の系譜にあるとする批評家は多く、Christopher Gillie もその著書 *Character in English Literature* (London, 1965) において *The Portrait of a Lady* (1881) を論じて (pp. 146-154), ヒロイン Isabel Archer を Miranda の子孫である 'mythic character' (p. 154) と呼んでいる。
- 9) Richard Chase, *op. cit.*, p. 119.
- 10) Oscar Cargill, *The Novels of Henry James* (New York, 1961) pp. 338-346.
- 11) F. O. Matthiessen, *Henry James: The Major Phase* (New York, 1963) p. 50.
- 12) Henry James はアメリカには次のような 'manners' がないと言っている。
 'No sovereign, no court, no personal loyalty, no aristocracy, no church, no clergy, no army, no diplomatic service, no country houses, nor parsonages, nor thatched cottages, nor ivied ruins; no cathedrals, nor abbeys, nor little Norman churches; no great Universities nor public schools—no Oxford, nor Eton, nor Harrow; no literature, no novels, no museums, no pictures, no political society, no sporting class—no Epsom nor Ascot! *Hawthorne* (New York, 1956), p. 34.
- 13) Lionel Trilling, *The Liberal Imagination* (London, 1951), p. 212.
- 14) 特に Marius Bewley, 'Hawthorne and Henry James', *The Complex Fate* (London, 1952), pp. 1-149 にくわしい。
- 15) このあたりの議論, romance と novel の相異は Laurence Lerner の 'Introduction' to Mrs. Gaskell, *Wives and Daughters* (Penguin Books, 1969) に多くを負っている。特に pp. 23-25 で, romance と realism に西欧文学を分けて Mrs. Gaskell の作品を realism とする部分がそうである。
- 16) Stephen Spender, 'Henry James', *The Destructive Element* (Philadelphia, 1953), p. 67.
- 17) Henry James, 'Preface' to *The Princess Casamassima* quoted in Richard Chase, *op. cit.*, p. 21.
- 18) Henry James, 'Preface' to *The Wings of the Dove*, p. xxii.
- 19) *Ibid.*
- 20) Joseph Warren Beach は *The Method of Henry James* (Philadelphia, 1954) の 'Introduction: 1954' で普通 James の小説のテーマとして使われる 'American Innocence' と 'European Experience' に相当することとして, "European" *sophistication* と American "imagination" をテーマとして説明しているが, どちらも妙を得ているし, 'imagination' は James のアメリカ人が高く評価しているもので Milly も Lord Mark に 'imagination' がないと批

判しているし、Kate もそう批判されることができ点、重要な意味を持つが、もとはといえば、romance の重要な特質を表わす語であることを忘れてはならない。

- 21) Edwin T. Bowden, *The Themes of Henry James: A System of Observation through the Visual Arts* (New Haven, 1956), p. 95.
- 22) Henrietta Ten Harmsel, *Jane Austen: A Study in Fictional Conventions* (The Hague, 1964), p. 41.
- 23) 例えば *The Ambassadors* における Strether は Mrs. Newsome との結婚問題, *The Golden Bowl* の Maggie は父との人間関係の圧迫を持ち、彼らは Milly の如く自由ではない。
- 24) 野島秀勝, ‘大西洋の両岸で—「成熟」と「故郷」—’, 佐伯彰一編「講座アメリカの文化 5. アメリカとヨーロッパ, 離脱と回帰」(南雲堂, 1970) p. 211. に歴史と歴史に汚れてない無垢という論があり、この辺は、その考えに大変負うている。
- 25) Elizabeth Stevenson, *The Crooked Corridor: A Study of Henry James* (New York, 1949), pp. 57-68.
- 26) 例えば Jane Austen の *Emma* における Emma Woodhouse, George Eliot の *The Mill on the Floss* における Maggie Tulliver さらに Charles Dickens の *The Great Expectations* の Pip などに代表される self-education を考えて頂きたい。